

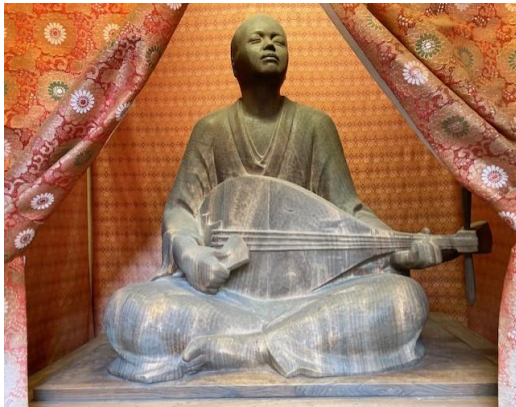
うたとかたりの対人援助学

第28回「広瀬浩二郎のユニバーサル論」

鵜野 祐介

はじめに 一赤間神宮の「耳なし芳一」像一

今年（2024年）2月、山口県下関市の赤間神宮^{あかま}を訪ねました。拝殿に向かって左手奥に耳なし芳一堂があり、その傍らに平家一門の墓が安置されています。芳一の木像の背後から、琵琶の調べに乗せて「祇園精舎の鐘の音…」と語る平曲が流れ出し、さざ波のように14基の小さな墓石に打ち寄せていました。そしてそれらを覆いかぶさるように茂る照葉樹の梢から、数知れぬ鳥たちの囀^{さえずり}りが降り注いでいました。目に見えない精霊たちが集まっていたのかもしれない。



2022年7月、日本昔話学会（於関西外国語大学）で広瀬浩二郎さんの講演を聴きました。国立民族学博物館教授の自称「座頭市流フィールドワーカー」です。講演の中でも「耳なし芳一」や琵琶法師の話があり、いつかこの地を訪れたいと期していました。それと同時に、広瀬さんが構想している「ユニバーサル・ミュージアム学」についてまとめておきたいと考えてきました。私自身が十年来温めてきた「ユニバーサルデザインとしてのうたとかたり」論と響き合うところがたくさんあるからです。

今回、広瀬さんの3冊の近著を精読し、私の着眼

点から抽出した文章を、項目別にして再構成してみました。ぜひじっくりとお読みください。

1. 点字とは

点字は一点ずつ、一文字ずつ書き進めていきます。点が文字となり、文となる。また、指を上下・左右へ自由に動かし、能動的に読むことができるのも点字の特徴です。点字は人生と同じだなあと思います。行きつ戻りつ、じっくりと。点を積み上げ、知識を体得する。先が見えないからこそおもしろい。点字は視覚障害者の生き方のシンボルです（2017：26-27）。

点字は、さわる文化のシンボルである
点は文字、文字は文となり、
人生を盛り上げ、歴史を掘り下げる
点字は人生と歴史を身体に刻み付ける
不規則かつ規則的な点の配列は、
僕たちが地球に触れた痕跡、そして生きた証
手を伸ばせば、もっと触れることができる
人間、世界、宇宙に（2017：100）

2. 「バリアフリー」「インクルーシブ」「アクセシブル」vs. 「ユニバーサル」

…バリアフリーとユニバーサルとの違いを整理しましょう。僕は全盲の視覚障害者ですから、五感ではなく四感しか使えません。バリアフリーとは「障害者の足りない部分を補う＝補助」の発想に根ざしています。…一方、「障害者の残存能力を保ち最大限活かす＝保助」の思想に基づき、既存の情報を再解釈・再創造するのがユニバーサルです。…障害者の「生き方＝行き方」（ウェイ・オブ・ライフ）を非障害者、マジョリティに応用するのが、ユニバーサルのもう一つの要件だといえます（2017：191-

192)。

…既存の枠組みそのものを変えるのがユニバーサルである。視覚障害者対応の一環で、さわる鑑賞を取り入れるという発想ではなく、普段は視覚に頼って暮らしている健常者の鑑賞を「見る」から「さわる」へ変化させる。…マイノリティの「生き方＝行き方」を導入することで、新たな「ユニバーサル＝普遍的」博物館、ツーリズムを構築できると、僕は確信している(2022:32)。

マジョリティが保持してきた価値観・世界観にどうやって、どこまでマイノリティを包含できるのかを検討するのが「インクルーシブ」である。同様に、既存の価値観・世界観からマイノリティが排除・疎外されないために、具体的な方策を提示するのが「アクセシブル」だろう。これに対し、マジョリティの価値観・世界観そのものを改変し、新たな普遍性を築くのが「ユニバーサル」である(2023:18-19)。

バリアフリー的な障害者対応とユニバーサルは異なる。「誰もが楽しめる」を具現するには、社会の多数派である健常者とミュージアムの関係をどうやって、どこまで変えていけるのかを検討しなければならない(2023:106)。

たしかに障害者と健常者が個性を尊重し合うインクルーシブ社会は、僕たちがめざすべき理想である。しかし、ここで僕は誰が誰をインクルード(包含)するのかと考えてしまう。健常者が障害者をインクルードする一方向の発想をどうやって乗り越えていけるのか。僕たちは少数派が主体となる逆方向のインクルージョンを提案していかなければならない(2023:164)。

インクルーシブが既存の価値観・世界観にさまざまな人々を取り込む試みだとすれば、ユニバーサルは新たな生きかたを開拓する挑戦といえる。健常者の見識・見解を前提とする博物館に視覚障害者が足を踏み入れる。視覚障害者には「見学」という博物館の常識が通用しない。ここで役立つのが聴覚や触覚を大切にしてきた視覚障害者の経験、盲学校教育の蓄積である。さわる展示、五感を活用する学習プログラムの立案は障害者支援ではなく、健常者をも巻き込むユニバーサル(普遍的)な博物館を築く第一歩となるに違いない(2023:165)。

3. インクルーシブ教育への提言

僕が弱視学級の教員から学んだことを要約すると、

以下の二つになる。「弱視であることを恥ずかしがらなくてもいい」(自信)、「見えない・わからない時は、自分が困っていることをきちんと周囲に伝える」(勇気)。どうすれば視覚障害児・者が自信と勇気を持つことができるのか。これは二一世紀のインクルーシブ教育においても最大の課題だろう(2022:106)。

現在のインクルーシブ教育は障害児・者個人の学習権保障に力点が置かれており、当事者コミュニティ(集団)とのつながりが弱い。地域の学校に通う視覚障害児は大半の場合、クラス、もしくは学校全体で一人というマイノリティである。つまり、学校内で同じ視覚障害の仲間に出会う機会がほぼない。…インクルーシブ教育を推進する上で、特別支援学級の充実、障害児・者同士の交流を図るサマーキャンプなどの企画が今後の重要課題になるだろう(2022:117-118)。

近年では「社会モデル」という理念が障害を定義する際の国際標準となっている。障害は個人の属性ではなく、個人と社会の関わりから生まれるものである。つまり、社会の努力によって障害は除去できると考えるのが社会モデルの根幹となる思想といえる。

英語で障害者は「Disabled」と称される。これは、社会によって「できなくさせられている」という意味である。…ちなみに、社会モデルを採用すれば、「害」を生み出すのは社会の責任ということになるので、「障がい」への表記変更はナンセンスである。「障害がある」原因を社会に求め、それを改善していこうとする大きな潮流は、二〇世紀の障害当事者たちの運動の成果、市民意識の成熟と位置付けることができるだろう(2022:124-125)。

見えないからこそ、できることがあります。できないことを数え上げるのではなく、できることをさがし、どうすればできることを増やせるのかと考える。発想の転換が必要でしょう。

視覚障害者自身の意識に加え、受け入れる一般の人たちも「障害者は別世界の存在ではなく、地続きで自分たちとつながっている」との意識、つまり「他人事」ではなく「自分事」としてとらえることが大切でしょう。(2022:163)

4. 障害の宇宙モデル

…「社会」を前提としていては、障害者(マイノリティ)のより良い生の達成、マジョリティとの共生の進展には、自ずと限界があるでしょう。排除と包摂の歴史は半永久的に繰り返され、人間は次々に新

しい「障害」を創り出す。

…ここで僕は「障害の宇宙モデル」という試論を提案します。「障害」という社会通念を広大な宇宙に解き放つのが宇宙モデルの本義です。この私論に従うならば、ユニバーサルデザインとは宇宙的デザイン、すなわちさまざまな社会通念（人間の常識）を宇宙に解き放つためのデザインということができるでしょう。宇宙は無限の可能性を秘めていると同時に、否応なく人間に不可能を突きつける機能をも有しています（2017：207）。

宇宙という観点に立てば、「障害／健常」という陳腐な二分法は改変を迫られるでしょう。「障害の宇宙モデル」はまだ大風呂敷を上げたばかりで、これからしっかり理論武装していかなければなりません。天文・教育などに関連する学際的な研究と、真のユニバーサルデザイン（「障害」という社会通念を宇宙に解き放つデザイン）を切り開く実践的研究との融合。そんな理想を追い求める識者たちの活動を通じて、「障害の宇宙モデル」という新パラダイムが成熟していくことを切望します（2017：209）。

ユニバーサルとは「普遍的」だけでなく、「宇宙的」とも解釈できる言葉である。宇宙には、あちら側とこちら側の区別がない。僕たちが暮らす地球も、宇宙を構成する一つの惑星に過ぎないのである。

…あちら側とこちら側、支配する者と支配される者、私たち彼ら。二項対立の壁、人と人を隔てる垣根を取っ払うことが文化人類学の課題とされてきた。…多彩なマイノリティ研究が進展する中で、障害に関してはまだ壁・垣根が残っていると感じる場面が多い。あちら側（健常者）の視点で、こちら側（障害者）の生活を取り上げる研究が主流となっているというのは言い過ぎだろうか。こういった現状を打開していくためには、僕のような障害当事者による発信が必須である。やはり、「宇宙人」を育てるためには、「めくらが威張る」実践を続けていくことが大事だろう（2023：178）。

5. ろう文化と視覚障害者文化

目が見えない・見えにくい「視座」から見常者中心の社会のあり方を問い直し、従来型の価値観・人間観の改変を迫る。こんな思いを込めて、「視覚障害者文化」を掲げることにしました。

聴覚障害者（ろう者）は手話の使用者であるという自信に立脚し、「ろう文化」を宣揚しています。近代以降の視覚障害者は、どちらかというと見常者への同化意識が強く、独自の文化を標榜する動きは弱かったと

いうのが僕の印象です。これは言語である手話と、文字である点字の違いに由来するのかもしれませんが。

「ろう文化」ほどラディカルでなくてもいいので、視覚障害者文化を探究してみよう。そして、そんな新しい文化をみんな育てていきたいと決意しました（2017：144）。

視覚障害者と聴覚障害者は同じ「障害者」に分類されるわけですが、それぞれの属性、ニーズはかけ離れています。単純な話、視覚障害者は聴覚情報で、聴覚障害者は視覚情報で外界を把握するのです。物音、人声から情報を得ることができないワークショップは、視覚障害者にとって居心地が悪いといえるでしょう。しかし、居心地の悪さの先には新たな気づきと発見があります。普段は直接交流する機会が極端に少ない視覚障害者・聴覚障害者が、ワークショップの中で互いに居心地の悪さをなんとか乗り越えたいと願う。これこそが「ユニバーサル」を開拓する知的冒険、「難しいけれどおもしろい」応用問題の出発点となるのです（2017：204-205）。

僕は、言語として手話を理解することができません。でも、時に力強く、時に繊細に動く「手」から、聴かせたい（感じさせたい）、聴いてほしい（感じてほしい）熱意がひしひしと伝わってきます。手話にも「言霊」が宿っていることに理屈抜き感動を覚えました。それは「喋る手」（ろう者）と「感じる手」（全盲者）の衝撃的な出会い、相互接触（触れ合い）の場が現出した「手放しの歓喜」ともいえるでしょう。

「手話は言語である」とよくいわれます。僕は点字と手話の比較に興味があり、ろう文化関係の本を何冊か読んできました。だから、手話が言語だというのは僕の中では一つの見識だったのです。一般に、豊富な見識を持つ人が有識者として尊敬されます。見ることによって「識」が蓄積されるというのが世間の常識です。見ることができない視覚障害者は、点字ディスプレイ、活字読み上げ装置などの視覚代行機器を導入して、見識を育ててきました。

そもそも見識があるのなら、聴識や触識があってもいいのではないのでしょうか。人々が多様な「識」を持ち寄れば、豊かな社会を築くことができます。障害者は、マジョリティとは異質の「生き方＝行き方」（ウェイ・オブ・ライフ）を経験することで、ユニークな「識」を会得した有識者なのです。今回、僕はろう者の「喋る手」に触れて、「手話は言語である」ことを確信しました。それは目で見るだけではわからない身体知、自らの手で能動的につかんだ触識ともいえるでしょう（2017：205-206）。

ワークショップ「手話の人と旅する宇宙」に参加し

て、僕は最初、孤独感と無力感に苛まれました。宇宙空間に投げ出されれば、人間は「できない」ことがあまりにも多い現実気づきます。考えてみると、視覚障害者が見常者中心の社会で生きていくということは、日々宇宙旅行しているようなものなのかもしれません。

日常的に「できない」に直面する障害者は、不可能を可能に変える強さと優しさを保持しています。僕がワークショップで出会った「喋る手」にも、この強さと優しさが脈打っていました。誤解を恐れずに言えば、常ならざる「識」を操る障害者は、宇宙時代のパイオニアなのです。果てしなく拡張する宇宙には、排除も包摂もありません。目に見えないもの、耳に聞こえないものに満ち溢れている宇宙に飛び出せば、視覚障害、聴覚障害という社会通念自体が成り立たなくなるでしょう(2017:208)。

6. 触文化

触覚を意識することは身体性の回復・開拓につながる。人間は空気・世界と触れ合うことで生きているので、触覚は人類にとってユニバーサル(普遍的)な感覚ともいえるだろう(2023:14)。

五感人間の感覚、潜在能力に意識を向けるための有効な言葉だが、一方で僕はこの語の頻出に多少の違和感を抱く。

そもそも、人間の複雑な感覚を五つに識別できるのか。日本文化は、目に見えないものを尊ぶ伝統を持つ。「草葉の陰」という表現が示すように、死者の霊は目に見えないが、確実に生者の周りにおり、日々の暮らしを見守っている。何らかの場面で第六感(五感以外の感覚)の存在を体感したことがある人は少なくないだろう(2023:62)。

視覚による情報伝達が困難な盲学校では、さわることを中心に、実体験が重視される。手・体を動かす経験を通じて、物事を「みて」いるのである。視覚に依存する健常者にこそ、「みる=験」の豊かさ、奥深さを実感してほしい(2023:65)。

さわるとは、単なる視覚の代替手段ではない。世の中にはさわらなければ分からない事実、さわると、より深く理解できる事物の特徴がある。これらは「触文化」(さわる文化)と呼ぶことができる。…新型コロナウィルスの感染拡大により、さまざまな場面でさわるのが制限されている。しかし、触れ合いは人間のコミュニケーションにとって不可欠であり、非接触社会から触発は生まれにくい。こんな社会状況だからこそ、僕たちは触文化の意義を積極的に発信していくべきではなからうか。ミュージアムは触文

化を育て、鍛える拠点となるに違いない(2023:106-107)

7. 近代的な二項対立の人間観を乗り越えて

近代以降、人類は「目に見える」世界を拡張することが進歩なのだと信じてきました。しかし、視覚で捉えることができる物は表面的なものです。「目に見えない世界>目に見える世界」。少し宗教っぽくなりますが、人間は「目に見えない」世界で生かされている。広くて深い「目に見えない」世界に飛び込み、一生かけて研究してみたい(2017:44)。

本来、「失明」と「得暗^{とくあん}」は表裏一体であり、目が見えなくなるとは、明を失うと同時に、暗を得る効能を人間にもたらす。近代化の流れの中で、人類は視覚に過度に依存する生活を送るようになり、得暗の価値が忘却されてしまった。「失明=得暗」の本義を探究することによって、人類は近代文明の桎梏から解放されるのではなからうか(2022:16)。

一般に、失明とは「見える」から「見えない」への転落と考えられがちだが、見え方のゆるやかな変更・移行と定義する方が実態に即している。「私たち」(見える人=健常者)・「彼ら」(見えない人=障害者)は、二項対立の存在ではない。「私たち」と「彼ら」の棲む世界は地続きであり、両者の間には多彩な見え方のグラデーションが広がっている。高齢化社会の到来に伴い、人の見え方は今後ますます多様化していくのは間違いない。地続きの認識が定着すれば、障害に対する偏見も是正されるだろう(2022:18-19)。

盲学校の名前を変えるならば、「触覚・聴覚支援学校」とすべきではないか。…二十一世紀の特別支援学校が「支援する人=健常者」「支援される人=障害者」の二項対立を助長してはなるまい(2022:20-21)。

誤解を恐れずに言うなら、点字の発明は、盲人を視覚障害者化したのである。僕は「盲人」「視覚障害者」を以下のように提示している。

盲人…目が見える人とは別世界の存在として生きた前近代の目が見えない人。琵琶法師・瞽女・イタコたちの盲人文化は独自性を持つが、排他的な側面も有していた。

視覚障害者…近代以降の目が見えない・見えにくい人。目が見えないことはマイナスであり、克服すべき「障害」と意識される。近代の視覚障害者史は「見えなくてもできること」を増やす苦勞と工夫の

歴史といえる。盲人は目が見えない人のみを指すが、視覚障害者には弱視者（目が見えにくい人）も含まれていることにも注意したい(2022:29-30)。

特別展の目的は、「ユニバーサル・ミュージアム＝誰もが楽しめる博物館」の具体像を示すことだった。この「ユニバーサル・ミュージアム」は和製英語である。通常、英語で「Universal Museum」といえば、総合的な調査研究・展示を展開する大規模な博物館を指すことが多い。…

ユニバーサル・ミュージアムを成立させる要件として以下の二つを挙げることができる。

①従来の視覚優位・視覚偏重の点字・教育プログラムのあり方を再考し、積極的に触覚活用を促す。

②点字・ワークショップなどの企画段階から障害当事者が主体的に参加し、マイノリティの発想、生き方(Way of Life)をユニバーサル化(普遍化)しよう心がける(2022:48-49)。

僕は盲人文化ではなく、触文化を標榜することで、ユニバーサル・ミュージアム実現への道を模索している。日本初のユニバーサル・ミュージアムは、欧米的な「ソーシャル・インクルージョン」とは一線を画する共生の可能性を提示できるのではないか。かつて琵琶法師や瞽女が音と声で健常者を魅了したように、イタコが目に見えない霊界と現世の媒介者となったように、ユニバーサル・ミュージアムには「健常/障害」という近代的な二項対立の人間観を乗り越える力が内包されていると確信する(2023:21)。

点字がない時代の盲人たちの「行き方＝生き方」はどんなものだったのか。…

①前近代の社会は視覚依存の文化ばかりではなく、聴覚・触覚型の文化など、複数の文化が混在していた。文明化を指向するそれぞれの文化が共存共榮していたともいえる。

②『平家物語』に代表されるように、盲目の宗教・芸能者は視覚(文字)に頼らない独自の文化を創造し、それを師匠の手から弟子の手へ、口から耳へと伝承していた。

③琵琶法師の口承文芸、イタコの口寄せ(シャーマニズム)などの盲人文化は、非視覚型の文明を創出する多様な種を内容していたが、その萌芽的可能性は視覚優位の近代化の過程で圧殺されてしまう(2022:110-111)。

8.「誰一人取り残さない社会」への違和感、「from」の思想

近年、SDGsとの関連で「誰一人取り残さない社会」という語をよく耳にする。…そんな僕だが、「誰一人取り残さない」には強烈な違和感を抱く。「取り残さない」って、誰が主語なの?「そもそも、誰が誰を取り残さないのだろうか」。「取り残さない」という語には、マジョリティ側の表面的な優しさ(危うさと怪しさ)が内包されているのではなからうか。…ひねくれ者と言われてしまうかもしれないが、僕はマイノリティとして生きること、マイノリティがごく自然に暮らせる社会を創ることにこだわってきたし、これからもこだわっていきたく思っている。…ユニバーサル・ミュージアムの具体像を探究してきた僕は今、自信を持って「誰一人取り残さない」と「誰もが楽しめる」はまったく異なる概念であると断言できる。

…さあ、僕は「取り残す」側ではなく、あくまでも「取り残される」立場を堅持しよう。「取り残される」者たちの言葉が「誰もが楽しめる」社会、文明をひらくことを信じて!(2022:265-268)

ユニバーサル・ミュージアムを構想する際、僕は「人に優しい」と「人が優しい」を区別してきました。「人に優しい」の背後には、多数派から少数派への親切の押し売り、「してあげる/してもらおう」という一方向の人間関係に陥る危うさが見え隠れします(2017:202)。

…読み聞かせという言葉に、僕は違和感を抱く。読むのも聞かせるのも主体は大人である。子どもの感性を重視する別の用語はないものだろうか。

『音にさわる』では、「触れ聞かせ」を提唱した。この絵本では、桜・セミ・落ち葉・雪などの触感が隆起印刷で表現されている。絵本に触れるのは読者である。能動的にイラストに触れる行為を通じて、絵本から目に見えないメッセージ、四季の音が聞こえてくる。つまり、聞かせる主体は桜やセミなのである。ややもすると、読み聞かせは「読む」→「聞く」の一方向になりがちだが、触れ聞かせは双方向の対話を促す。読み聞かせ活動に触れる要素が加わり、昔話の再評価が進むことを期待したい(2023:72)。

ユニバーサルを具体化する三つの視座

1. 「with」: 健常者(マジョリティ)が障害者(マイノリティ)を包含し、社会全体が「普通」であることを志向する。この思想を体現する語が「with」です。
2. 「for」: 障害者のために運用されるバリアフリーツアーには、マイノリティが主体的、能動的に参加できる魅力があります。……マイノリティの立場を尊重し、「for」の精神に徹するという点で、バリアフ

リーの視座は今後も大切にしていかなければなりません。

3. 「from」: 僕は「with」と「for」の不十分な点を補うのが「from」であり、この「from」こそがUT [universal tour]の眼目だと考えています。UTが商業ベースで成り立つためには、健常者にとっても楽しめるツアーでなければなりません。旅行を通して障害者の気持ちによりそうのは大事ですが、介助の延長ではツアー参加の積極的動機とはなりません。…「with」や「for」の主体は健常者（マジョリティ）になりがちです。「from」（障害者発）の観光プランがどこまで健常者を引き付け、巻き込んでいけるのか。更なる実験の蓄積に期待したいと思います（2017：250-254）。

日本の障害者福祉の先達・糸賀一雄は「この子らを世の光に」という名言を残している。「この子らに世の光を」という従来の福祉のあり方を根本から問い直す糸賀の寸言は、今もなお色あせない。糸賀の理念を一步進めて、僕は「この子らから世に光を」と言いたい。「この子らから」の「from」の思想には、琵琶法師の平曲のように、障害者が主導するユニバーサルな文化を発信しようという決意が込められている（2023：165）。

9. 触角を取り戻せ

人間よ、触角を取り戻せ
耳を失った芳一は、
全身で事物の本質を掴み取る極意を身につける
目で見ると、耳で聴くという束縛から離れ、
芳一は自由に歩き出す
できる人と出来ない人、勝者と敗者
文明と未開、健常と障害
目で見ると、耳で聴いているだけでは、
人間は二項対立の価値観を乗り越えられない
芳一は語る、目がなくても景色はがあると
芳一は唄う、耳がなくても音楽はがあると
(2022：246)

琵琶法師や瞽女は、自身の触角を鍛えるために歩いていた。触角は、彼ら独自の芸能を発展させるために不可欠な武器だった。『平家物語』や瞽女唄は、単に福祉的な文脈で支持されてきたわけではない。盲人たちが各地を歩き、触角でとらえた森羅万象の気配が、音と声による語りに集約された。それゆえに、『平家物語』や瞽女唄は、目が見える者には、創造できない優れた芸能として評価されたのである。歩くことは語る、唄うこと、さらには生きることと直結していたといえるだろう（2022：27-28）。



視覚（見る）と触覚（さわる）は二項対立の概念・感覚ではない。視覚とは、触角（全身に分布するセンサー）の一部であるといえるのではなかろうか。動物的な触角を取り戻すことで、僕たちは「見る＋さわる」、さらには「見る×さわる」の統一・統合の境地に至るに違いない。ここでは、自己と他者の垣根を取っ払い、全身の触角を通じて森羅万象とつながることを「統魂」と定義したい（2023：180）。

おわりに —ユニバーサルデザインとしてのうたとかたり—

広瀬さんの議論を「うたとかたり」の観点から整理してまとめると以下になるでしょう。

うたやかたりを含む文化伝達において、「享受者（受け手）」が用いる主要な感覚器官は、一般的には「聴覚」や「視覚」と考えられているが、実際には、複数（多感覚）、五感全て、さらには「第六感」をも連動されながら統合的に働いており、その中心となるのは「触覚」である。

つまり、「全身の触角を通じて森羅万象とつながる」ことが肝要であり、その時、「視覚障害者」「聴覚障害者」「〇〇障害者」などとラベリングされ分断されたマイノリティとしての存在から、「触文化」を共有する「ユニバーサル（宇宙的・普遍的）」な存在への人間観の転回が生起する。そして、うたやかたりにはこの転回のスイッチを押す可能性を秘めている。

私自身もまた、これからも「ユニバーサルな文化」の探求の旅を続けていきたいと思っています。

<引用・参考文献>

- ・広瀬浩二郎『目に見えない世界を歩く 「全盲」のフィールドワーク』平凡社新書2017
- ・同『音にさわる——はるなつあきふゆをたのしむ「手」』絵・日比野尚子、偕成社2021
- ・同『世界はさわらないとわからない 「ユニバーサル・ミュージアム」とは何か』平凡社新書2022
- ・同『ユニバーサル・ミュージアムへのいざない 思考と実践のフィールドから』三元社2023

（*広瀬さんのポートレートは2017 帯カバーより。）